

# 入学者選抜段階における 公立中高一貫校の学力要求

—教育課程評価としての適性検査に着目して—

助 川 晃 洋

## I 着想の経緯と研究の課題

1997（平成9）年6月26日の中央教育審議会第二次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」での「選択的導入」に向けた提言（「子どもたちや保護者などの選択の幅を広げ、学校制度の複雑化構造を進める観点から、中高一貫教育の選択的導入を行うことが適当である」）を受けて、「学校教育法等の一部を改正する法律」（＝改正法）が国会で可決・成立し、1998（平成10）年6月12日に公布、1999（平成11）年4月1日に施行されたことで、中高一貫教育の制度化が実現し、公立中高一貫校の設置が可能となった。このとき岡山県に岡山市立後楽館高等学校・中学校、宮崎県に県立五ヶ瀬中等教育学校が、最初に開校している。総合学科高校、単位制高校、科学技術高校、産業高校、昼夜間定時制高校、エンカレッジスクール（基礎的・基本的な学力を身につけるための「やり直し」支援）、チャレンジスクール（不登校や中退を経験した生徒向け）、デュアルシステム（企業と連携して在学中にインターンシップよりも長期の就業訓練を実施）、その他の新しいタイプの高校の創設、指定修業年限や通学区域制限の撤廃、入学者選抜方法の改善（「脱偏差値」）等<sup>(1)</sup>、1980年代後半に第二次ベビーブームによるピークを迎えた生徒数の急速な減少に直面して、1990年代に入って以降に本格的に進められた高校の再編整備、すなわち後期中等教育の多様化、或いは機能分化路線を「横の弾力化」として位置づけるとするならば、冒頭で整理した中高一貫教育制度の導入の動きは、「縦の弾力化」と言ってよい。その実施・運営形態としては、異校種間の「接続／

アーティキュレーション」の度合いに応じて、三つのタイプが想定されている<sup>(2)</sup>。

●中等教育学校

- 一つの学校として、6年間一体的に中高一貫教育を行います。
- 公立の中等教育学校については、学力検査を行わず、それぞれの学校の特色に応じて、面接、実技、推薦、抽選等の方法を組み合わせて行います。

●併設型の中学校・高等学校

- 中等教育学校よりも緩やかな設置形態であり、高等学校入学者選抜を行わずに<sup>(3)</sup>、同一の設置者による中学校と高等学校を接続します。
- 公立の併設型の中学校の入学については、中等教育学校と同様の方法で行います。

●連携型の中学校・高等学校

- 既存の市町村立の中学校と都道府県立の高等学校など、異なる設置者による中学校と高等学校が教育課程の構成や教員・生徒間交流等の連携を深める形で中高一貫教育を実施します。
- 連携型の高等学校においては、調査書や学力検査による入学者選抜は行わず、面接、実技等の簡便な方法で行うことができます。

しかし入学者選考・決定（中学校（前期課程）入学段階／「12の春」でのことを指すものとし、高校（後期課程）入学段階／「15の春」でのこと、すなわち高校入試については、考察の埒外とする）の方法に着目すると、その実態は、上述した通りには決していない。とりわけ中等教育学校と併設型中高一貫校（以下では、この二つを総称して「公立中高一貫校」というタームを用いることとし、連携型中高一貫校は含まないものとする。この原則は、表題部分それ自体にも遡って適用する。なお同様のスタンスは、本研究とは違った脈絡で公立中高一貫校について論じた著作においても、しばしば見出される<sup>(4)</sup>）では、「学力検査を行わず」

という文言とは裏腹に、適性検査という名の事実上の学力検査<sup>(5)</sup>の結果を重要な判断材料として合否を判定することで、紛うことなき入学者選抜、すなわち真正正銘の中学入試が公然と行われている。そのため、この二つの形態は、公立でありながら、私立と同様に「選ばれる学校」、「選択された学校」としての意味合いを強く有する。同じ「じゅけん」でも私立は「受験」、公立は「受検」と呼ぶ、という漢字1文字の違いはあるにせよ、両者の間に決定的な違いを見出すことは、もはや誰にもできないし、それ以前に「受検」という言葉が市民権を得ておらず、結局のところ、「受験」の方で一括可能であることは、世間一般レベルで通行している語法を見る限り、すでに既成事実となっている。その証左として、一つの卑近な例を挙げるならば、旧浦和市で創業し、現在では同市と旧大宮市にまたがるさいたま市浦和区、南区、大宮区、見沼区を中心に、上尾市と蓮田市を加えた埼玉県内9地区で事業を展開するあづま進学教室（春日部市で英進セミナーとして創業し、現在では旧与野市にほぼ相当するさいたま市中央区に本部を置くスクール21と並んで、「埼玉の入試を知り尽くした」と自ら豪語する地場大手）には、「埼玉の附属中・公立中高一貫校受験」（下線は筆者による。直下の引用文でも同じ）のための小学5・6年生向けクラスが設けられているし、同教室の新聞折込広告（筆者が参照したのは、2016（平成28）年1～3月中に、何度か自宅に届けられたもの）には、次のような記載が見られる。

2019年春 新小4生から受験可能な完全6年一貫教育校  
さいたま市立中等教育学校（仮称）開校！ 定員160名

“さいたま市から世界に飛躍するグローバル人材の育成”を柱とする中等教育学校が、新4年生の生徒が中学生になるときに開校します。

中等教育学校を含めた、浦和中・伊奈学園中・埼玉大附属中の受験対策は、合格実績No.1の「あづま進学」へ！

周知のように、改正法の採決に際しては、1998年5月22日の衆議院文教委員会と同年6月4日の参議院文教・科学委員会において、「学校教育法等の一部を改正する法律案に対する附帯決議」

が付されており、そこでは、「受験準備に偏したいいわゆる『受験エリート校』化など、偏差値による学校間格差を助長することのないように十分配慮すること」、「入学者の選抜にあたって学力検査は行わないこととし、学校の個性や特色に応じて多様で柔軟な方法を適切に組み合わせて入学選抜方法を検討し、受験競争の低年齢化を招くことのないように十分配慮すること」（以上いずれも衆院でのもの。参院でのものは、いくつかの箇所で文言が異なる。前者の場合は、最後が「十分に配慮すること」となっている。後者の全文は、「入学者の決定に当たって学力試験を行わないこととし、学校の個性や特色に応じて多様で柔軟な方法を適切に組み合わせて入学者選抜方法を検討し、受験競争の低年齢化を招かないように十分に配慮すること」である）の二点が明示されていた。しかし、そもそも公立中高一貫校の設置が求められた背景には、例えば東京都の場合であれば、私立中高一貫校が、そのメリットを活用して難関国立大学（端的に言えば、東京大学のことであり、広げても東京工業大学、一橋大学、京都大学、どこかの医学部まで）や有名私立大学（早稲田大学、慶応義塾大学、上智大学）への進学実績を伸ばす一方で、1967（昭和42）年の学校群制度の導入以降、それまで高い社会的威信を得てきた名門都立高校（日比谷高等学校、戸山高等学校、西高等学校のように、戦前のナンバースクールに起源を持つ伝統校。日比谷、戸山、西の3校は、八王子東高等学校とともに、2001（平成13）年に東京都教育委員会から、進学指導重点校の指定を受けている）が弱体化し、凋落の一途を辿り、都立高校それ自体はもちろん、公立中学・高校全体の劣勢が顕著になったために、「公立離れ」を防ぎ、その「復権」を実現することが急務となっていた、という差し迫った地域事情があった。それだけに、優秀な子どもの獲得、或いは早期の囲い込み、その結果としてもたらされる学校の等質集団化のための高倍率のセレクションが、公立中高一貫校を舞台にして当たり前のごとくに行われ、黙認され続け、それどころか平均的な所得階層に属する家庭（必ずしも原義通りではないにせよ、それでも教育的マルサス主義に基づく一種の「教育家族」、家族社

会学で言う「教育する家族」のニーズ、より詳しく、しかし平たく言えば、子どもに私立並みの「よりよい」、「質の高い」教育を受けさせたい、でも入学金や授業料等の教育費にそれほどお金をかけられない保護者、親／父母の教育戦略に応えるものとして歓迎され<sup>(6)</sup>、やがて年中行事として定着するようになっていったのは、むしろ当初の予定通りであり、また大方の予想通りである、という方が正しい。

ただし公立中高一貫校の適性検査の出題内容にまで目を向ければ、そこからは、従来の教科別学力試験を踏襲する私立中学入試（こうした現状認識には、当然異論があるであろうし、それがもはや個別の事例の実態を正確に反映していないことは、筆者もまた、百も承知である<sup>(7)</sup>。ここではとりあえず、あえて比較すれば、また大づかみに言えば、ほぼこの通りであろう、という程度の納得の上で、先を読み進めていただきたい）との相違点を明瞭に看取することができる。議論を先取りして言うと、公立中高一貫校の適性検査では、国語や算数といった各教科の問題に代わって、教科横断的な問題を解くことが要求される。この点は、以前に我が子の中学受験を経験した、或いは今後それが控えている（その切迫感や圧力からすれば、待ち受けている、とでも言った方が適切だろう）保護者の間では、大手進学塾や各種メディア（手頃で手軽な紙媒体の一つである雑誌であれば、日能研『進学レーダー』、四谷大塚『Dream Navi』、栄光ゼミナール『進学通信』等の業界誌を中心に、『AERA』の特集記事、『週刊東洋経済』、『週刊ダイヤモンド』といった経済・ビジネス誌の特集号や『プレジデントFamily』、『AERA with Kids』、『日経キッズプラス』、『ducare／デュケレ』、『edu／エデュ』のような子育て・教育誌が加わる）が発信する情報のシャワーを浴びせられ、「少しでも我が子のためになれば」と思って受け入れ続けた結果、もはや誰もが知るところの共通理解となっている。では教育学研究者の間においてもまた、同様の理解が同程度に広がっているのかどうか。一概に、そうとは言えない。それどころか教育学は、現在の研究水準では、中学受験のリアリティーに全く迫ることができていない。

もっとも公立中高一貫校志望の子どもを持つすべての、と言い切って差し支えないほどに圧倒的多数の保護者は、私立中学入試との間にある「傾向と対策」<sup>(8)</sup>の違いを理解しているのであって、国の中等教育改革や自治体レベルでの地域教育改革の動向に照らして、「どのような問題が出るのか」、「この問題は、何を問うているのか」、「いまなぜ、ここで、それが問われなければならないのか」を深く洞察し得ているわけではない。もちろん専門の教育学研究者でもない限り、そもそも彼／彼女らには、その必要が全くない（ともかく我が子が志望校に合格しさえすればよいのだから）。そして関連する教育学分野の文献を渉猟してみると、公立中高一貫校の、いわゆる「入り口／アドミッション」の段階のあり方に（断片的にはなく、まとまった分量で、それも口頭発表で済ませるのではなく、きちんと活字に残す形で）言及している取り組みが、ほぼ皆無であることに、直ちに気づかされる。公立中高一貫校に関する先行研究は、もともと数自体が少なく、しかもその設置経緯と量的拡大のプロセスを取り上げたものばかりが目立っている（例えば政策決定の場での議論の推移の追跡や主な論点の整理、文部科学省が行った「学校基本調査」の数値データの紹介や二次分析、特定の地域・学校での改革・実践動向のレビューやアンケート調査等）<sup>(9)</sup>。本研究は、こうした研究状況の不備を補うことを意図して、主に教育方法学の立場から遂行される。

入試とは、本来教育課程（カリキュラム）評価として位置づけられるべきであり、上級校（受け入れ校）における診断的評価としての意味を持つと同時に、下級校（送り出し校）での学力保障を迫るものでなければならない。このような基本的立場を確認した上で、本研究では、公立中高一貫校の入学者選抜段階で実施される適性検査が、志願者に対して求めている学力（学力要求）の内実を把握することを課題とする。行論に即して言えば、公立中高一貫校の適性検査の特徴の根幹について、その最大公約数的な部分を抽出した上で（Ⅱ）、東京都立白鷗高等学校附属中学校（＝白鷗中学校）のケースをサンプルとして、適性検査における出

題の実態を把握する（Ⅲ）。ただしⅢ章では（ということは、必然的に本研究全体を通して）、実際の試験問題それ自体を転載することは一切していない。そこでの作業は、出題の方針、ねらい、要点を確認するところまでに、意識的に、あえてとどめている。なぜなら設問によっては、媒体種別にかかわらず、問題（文）の全部、或いは一部が非公開であることから、すべてが著作権の上で法的に保護されているか、或いはそのような箇所を含むことが確実である場合や、例えば書物の中では公開されていても、インターネット上では閲覧不可である（これとは逆のケースもある）など、対応がまちまちで、権利の所在と使用許諾方針がはっきりしない場合が見られるからである。

## Ⅱ 出題の全体的傾向・意図・背景

本章では、公立中高一貫校の適性検査にかかわって、次の三つの問いに対する回答を提示する。

- （１） どのようなテーマ・事項を扱った問題が出されているのか。
- （２） 子どものどのような資質・能力を測定しようとした問題が出されているのか。
- （３） どの学校でも、似通った問題が出されているのはなぜなのか。

まず（１）について。

この問いに対する一つの回答は、「公立中高一貫校に強い」ことで知られる進学塾ena／エナ（「教育網連合」と訳出される education network associationの頭文字をとった略称。東京都新宿区に本社が所在する学究社の運営で、城西・多摩地区を中心とした都内全域と埼玉県、千葉県、神奈川県内の政令指定都市及び中核市に多数開校）が監修した「対策問題集」の構成（「もくじ」）に反映されている。「この本は、公立中高一貫校の『適性検査』問題を分析し、８つの大きなテーマを設定しています」。

### テーマ１ 規則性に関する問題

- ① 長さや個数などの規則性を見つけて活用する問題

- ② 数字の規則性を見つけて活用する問題
- ③ 規則性を説明する問題
- ④ 文字や数字を表す規則を見つけて活用する問題
- ⑤ 図形に関する規則性を見つけて活用する問題

テーマ2 図形と空間に関する問題

- ① 図形の基本性質をふくむ問題
- ② 図形の大きさにもとづく問題
- ③ 立体をイメージする力
- ④ 図形の移動をイメージする問題
- ⑤ 組み合わせられた図形

テーマ3 環境・社会に関する問題

- ① 食生活と食料自給率をテーマにした問題
- ② 日本の産業をテーマにした問題
- ③ 少子高齢化・福祉をテーマにした問題
- ④ 地球温暖化をテーマにした問題
- ⑤ リサイクル・省エネルギーをテーマにした問題

テーマ4 自然現象・科学に関する問題

- ① 植物・動物、生物のつながりに関する問題
- ② 物質の性質や状態を題材にした問題
- ③ 太陽や月の動き、見え方に関する問題
- ④ 力や光、電気を題材にした問題
- ⑤ 実験や観察の方法、器具の操作に関する問題

テーマ5 コミュニケーション・企画立案に関する問題

- ① 行動の計画や案内をテーマにした問題
- ② 地図の読み取りや情報の伝達をテーマにした問題
- ③ 言葉づかいや文字の知識に関する問題
- ④ 国際化・留学生との交流などをテーマにした問題

テーマ6 歴史や伝統・生活の科学に関する問題

- ① 歴史上の出来事や人物に関する問題
- ② ふりこの性質を題材にした問題
- ③ てこのつり合いを題材にした問題
- ④ 世界遺産を題材にした問題

テーマ7 放送による聞き取り問題

放送を聞き、情報を理解できたかを問う問題

テーマ8 読解・作文に関する問題

① 筆者の主張をふまえ、自分の体験をもとに意見を書く問題

② 筆者の主張に対して、自分の意思を表示する問題

③ 身近なテーマについて、自分の考えを書く問題<sup>(10)</sup>

この8テーマ分類とそれぞれの下位に設定されている1～5項目の双方が、どの程度妥当であるのかについては、正直なところ、よくわからない。ただし筆者が、いくつかの類書<sup>(11)</sup>と比較・照合した限りでは、見出しの文言、大小の柱の立て方や数の違いこそあれ、ほぼ同様の視点が採用されていることが判明した。また「適性検査は算数型・理科型・社会型・国語型・情報分析型・企画立案型の6パターンがあり、(中略)一般に公立中高一貫校の入学試験の適性検査問題の種類は、おおよそ以下のaからeに分類できる」という教育学的知見との間にも、それほど大きなズレは見られない。

- a. 資料を読み解く問題
- b. 筋道立てて考える問題
- c. 日常生活における問題解決
- d. 教科知識活用問題
- e. 読解問題及び、読解に基づいた作文問題<sup>(12)</sup>

次に(2)について。

『論理思考の鍛え方』において小林公夫は、小学校（「お受験」）から大学までの各段階の入試、企業採用試験、国家公務員I種試験、ロースクール適性試験、医師国家試験等で問われる「能力因子」を七つに類型化している。

- 1 推理能力
- 2 比較能力
- 3 集合能力
- 4 抽象能力
- 5 整理・要約能力

## 6 直感的着眼能力

### 7 因子順列能力<sup>(13)</sup>

そして『公立中高一貫校』において小林は、これらは、「従来」の「公立中高一貫校の入試についても例外ではなく妥当するものでした」と述べている。さらに同書において小林は、「ここ数年の公立中高一貫校の問題を詳細に分析してみると、私が想定した従来型の能力因子だけでは説明のつかない能力因子、換言すれば新しい『資質』が問われ始めていることに気づかされました」と述べて、新たに七つの資質・能力が問われるようになったことを指摘している。

- 1 判断推理力+空間把握力
- 2 集合能力+観察力
- 3 図解化力+分析力
- 4 異文化を理解する力
- 5 弱者に対し温かい視点を持つ力
- 6 複数の対立する価値を比較し利益を衡量する力
- 7 自分の考えを他人に伝える力<sup>(14)</sup>

小林前掲二著書以外では、「適性検査で問われる3つの力」として、「読み取る力」、「気づく力」、「伝える力」を挙げているものもあるし<sup>(15)</sup>、早稲田進学会／朝日学生新聞社の「対策シリーズ」が、「作文力」、「分析力」、「思考力」、「考察力」の「4冊セット」で、或いは「朝日小学生新聞の学習シリーズ」という別称を冠せられて、それぞれ「〇〇力」ごとに分冊で刊行・販売されている事実も見逃すことができない<sup>(16)</sup>。それでも管見の限りでは、たとえどのような整理をしようとも、全体として見れば、それらの間に決定的な違いはないように思える。そして公立中高一貫校の適性検査では、正解を出すことそれ自体もさることながら、正解に至るまでの論理的思考のプロセスが重視されており、小学校で学び、身につけた知識・技能をフル活用して、文章、画像、図表、統計等の各種資料をきちんと読み解き、多量の情報を迅速に処理し、自らの立ち位置や軸足を定め、考えをまとめ、（頭の中で、そして紙の上で）しっかりとした論理を組み立て、理路整然と展

開し、他者に対して自分の意見・主張を力強く表明・発信する力が試されている、と結論することができる。

最後に（3）について。

公立中高一貫校の適性検査の問題が、いつでも、どこでも、どれも似通ったものになるのは、そのあり方の許容範囲が、学校の組織・機制の大本との関係で、予め狭められていることに起因している。東京都内に既設の公立中高一貫校全11校（あくまでも本研究執筆・刊行時点現在の数字）中の9校（白鷗高等学校・附属中学校は後に回し、「心・知・体の調和」を掲げるだけの南多摩中等教育学校は除外したため、対象が2校減となる）の「学校の目標・教育理念」には、次の一節が含まれている（白鷗、南多摩の両校も含めて、特に断りのないものは、すべて都立である）。

両国高等学校・附属中学校：「将来、世界的視野をもって様々な分野でリーダーとなる人間を育てる」

小石川中等教育学校：「自主自立の気概を身に付け、卒業後も自ら人生に果敢に取り組んでいく生徒を育成」

桜修館中等教育学校：「世界の中の日本人としてのアイデンティティをもって進んで国際社会に貢献しようとする態度を培う」

武蔵高等学校・附属中学校：「『社会に貢献できる知性豊かなリーダー』の育成を目指す」

立川国際中等教育学校：「国際社会に貢献できるリーダーとなるために必要な学業を修め、人格を陶冶する」

富士高等学校・附属中学校：「自ら判断し挑戦する精神を高める」

大泉高等学校・附属中学校：「我が国の文化を理解し、他国の文化・伝統を尊重する態度を養い、国際的な視野を培う」

三鷹中等教育学校：「思いやり・人間愛（ヒューマニティ）を持った社会的リーダーの育成」

千代田区立九段中等教育学校：「豊かな教養と高い志を身に付けさせ、自己実現に向かって創造的・意欲的に行動できるリーダーとしての資質や能力を育成する」<sup>(17)</sup>

このように東京都内の公立中高一貫校は、露骨なまでにエリート主義的であり、しかもそれを全く隠そうともせず、逆に公言することで、主体的で意欲的な「強い個人」<sup>(18)</sup>、社会のリーダー、グローバル人材の育成を明確に志向している。さらに（同上の時点から見て）最新の動向を付け加えるならば、立川国際中等教育学校に附属小学校を設ける形で、2022（平成34）年度に開校する予定の都立小中高一貫校の場合も、都立小中高一貫教育校基本構想検討委員会での議論の中で、「理数教育」から「英語教育」へと重点の置き所が移動したものの、その「看板は『エリート教育』」のままである<sup>(19)</sup>。

「中間まとめ」（2013（平成25）年8月）<sup>(20)</sup>

（1）教育理念

理数を中心に、一人一人の資質や能力を発見し伸長させ、世界に伍して活躍し貢献できる人間を育成する

（2）育成すべき生徒像

理数分野における優れた資質や能力を高め、将来、我が国の科学技術の発展をけん引するとともに、世界に貢献し得る人間

（3）教育方針

- 科学で社会をけん引する人間を育てる
- 思考力、判断力、表現力を鍛え、世界で活躍する力を育てる
- 優れた資質や能力を最大限に伸ばす
- 我が国の歴史や文化を尊重し、主体的に社会の形成に参画する態度を養う

「検討結果」（2015（平成27）年11月）<sup>(21)</sup>

（1）教育理念

次代を担う児童・生徒一人一人の資質や能力を最大限に伸長させ、世界で活躍し貢献できる人間を育成

- 高い語学力
- 豊かな国際感覚
- 日本人としての自覚と誇り

（２）生徒の将来の姿

高い語学力を活用して世界の様々な人々と協働するとともに、論理的な思考力を用いて、諸課題を解決し、様々な分野で活躍する人材

（３）教育方針

- 高い語学力と豊かな国際感覚を育てる
- 思考力、判断力、表現力を鍛え、世界で活躍する力を育てる
- 日本人としての自覚と誇りを持ち、主体的に社会の形成に参画する態度を養う
- 児童・生徒の資質や能力を最大限に伸ばす

隣県に目を向けると、埼玉県では、さいたま市立浦和高等学校・中学校が、「学校教育目標」として、「高い知性と豊かな感性・表現力を備えた国際社会に貢献できる生徒の育成」を掲げている。

知性

6年間の一貫した教育活動を展開し、高い知性と豊かな教養を身に付けさせる。

創造

高い志をもち、人間性豊かな創造性あふれる人材を育成する。

活力

豊かな感性・表現力を備え、国際社会に貢献できる活力ある人間を育成する<sup>(22)</sup>。

またさいたま市立大宮西高等学校（2013年度から、さいたま市教育委員会が指定するグローバル化先進校として、「国際交流の充実と外国語運用能力の育成」、「これからのグローバル社会で必要なICT活用能力に基づき、世界へ情報を発信できる力の育成」をめざした取り組みを展開中<sup>(23)</sup>）の「充実発展」を「期待」して、2019（平成31）年度に開校する予定の市立中等教育学校の「育てたい生徒像」は、「さいたま市から世界へ飛躍するグローバル人材」となっている。

- グローバル化が進む社会の中、日本の文化を理解し世界の舞台で活躍できるリーダーとなる人材
- 豊かな人間性と社会性を備え、「知・徳・体・コミュニケーション」のバランスのとれた人材
- さいたま市の魅力を世界に発信し、将来のさいたま市を支え、その力をさいたま市に還元できる人材
- 自分で考え、自分で起業するような、自立心と知的好奇心をもった人材<sup>(24)</sup>

なお埼玉県には、上述した2校に加えて、もう一つ、県立伊奈学園総合高等学校・伊奈学園中学校があるが、本研究では考察対象外とする。同校は、もともとが、1984（昭和59）年度に全国で初めて設けられた総合選択制普通科高校であり、2003（平成15）年度に中学校を併設している。そこでは、何より生徒の個性を伸ばすことに重点が置かれていて（校訓「自彊創生（じきょうそうせい）」、「自ら努め励み、自らをも新しく創り生み出すこと」、「努力することによって、個性を最大限に開花させ、自己実現を図ってほしい」という願いがこめられています」、教育目標「一人一人の個性を伸ばし……」、教育方針「……個性の伸長と学力の向上に努める」<sup>(25)</sup>）、中高一貫教育よりもむしろ、学系システムの導入（人文系、理数系、語学系—英語、ドイツ語、フランス語、中国語—、芸術系—音楽、美術、工芸、書道—、スポーツ科学系、生活科学系、情報経営系）、ハウス（「小さな学校」、「生活の場」）への所属、広大な敷地と充実した施設・設備等、他方面でのユニークさの方が、ずっと際立っている。また伊奈学園中学校の入試では、適性検査は行われておらず、第一次選考で作文Ⅰ・Ⅱ、第二次選考で面接が課されている。ただし作文と銘打ってはいるものの、その試験は、「過去の入学者選考問題（問題用紙、解答用紙、出題のねらい。正答と配点）」<sup>(26)</sup>を見れば明らかのように、形式と内容において、他校の適性検査に相当するものと見て全く差し支えない。

さらに千葉県（全3校）では、県立千葉高等学校・中学校が、「千葉から、日本でそして世界で活躍する心豊かな次代のリーダーの

育成)、千葉市立稲毛高等学校・附属中学校が、「真の国際人の育成」、県立東葛飾高等学校・中学校が、「グローバル社会で活躍するための基礎」の「涵養」、「世界で活躍する心豊かな次代のリーダーの育成」、神奈川県(全4校)では、県立相模原中等教育学校、県立平塚中等教育学校、川崎市立川崎高等学校・附属中学校が、それぞれ「次世代を担う人材」、「次世代のリーダー」、「国際都市川崎をリードする人材」の「育成」、横浜市立南高等学校・附属中学校が、「国際社会で活躍するリーダーの育成」をめざした教育活動を展開している<sup>(27)</sup>。

首都圏の公立中高一貫校の設置理念・目的が、相互に極めてよく似ていることは、もはや明らかであろう。しかもこうした状況の大勢は、北は北海道、東北(例えば北海道立北海道登別明日中等教育学校、青森県立三本木高等学校・附属中学校、岩手県立一関第一高等学校・附属中学校等)から南は九州、沖縄(例えば宮崎県立宮崎西高等学校・附属中学校、鹿児島県鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校・中学校、沖縄県立与勝高等学校・与勝緑が丘中学校等)に至るまで、全国各地の事例を縦覧してみても何等変わりがない(2016年3月28日の時点で、上述した6校を含む各校開設の公式ホームページのうち、閲覧可能な状態にあり、また放置され続けることなく、定期的に情報が更新されていて、即応性や信頼性が担保されているとみなし得るものすべてを筆者が順次チェックしていった結果による。ただし検索サイトを介して誰もが容易にアクセス可能であるため、にもかかわらず無用に文字列を並べて煩雑になることを避けるため、そして何より直・間接を問わず、引用や本歌取りは行っていないため、ここでも「注」でもURLは省略する)。すなわち公立中高一貫校の適性検査において、コンピテンシー(OECDのキー・コンピテンシーを想起すれば間違いはない)とそれにつながるリテラシー(流行の言い方をすれば、PISA型学力、活用型学力であり、今日的な意味での「読解力」<sup>(28)</sup>にほかならない)、換言すれば、実社会においても通用する汎用的な資質・能力<sup>(29)</sup>の基礎を診断するのに適した問題が一斉に案出されるのは、必然的なこととみなされるべきである。

### Ⅲ 出題の個別実態

本章で取り上げる白鷗高等学校・附属中学校は、1888（明治21）年12月に創立された東京府高等女学校に起源を持ち、都制の施行や男女共学の実施等に伴う設置主体と何度かの校名の変更を経て、1950（昭和25）年1月に改称された東京都立白鷗高等学校を母体とし、2005（平成17）年度に附属中学校を設置して、東京都内で最初に開校した併設型の公立中高一貫校である。同校は、2010（平成22）年度（完成年度）をもって高校を卒業した一期生（中高一貫生は約160人、高入生まで含めると約240人）が、2011（平成23）年度大学入試において、東大に5人、東工大に3人、一橋大に2人、早慶上智に66人も見事現役で合格し、その他の大学にも例年を大きく上回る数の合格者を出す快挙を成し遂げて（「若井文隆校長」が「語る」ところによれば、「白鷗高校が中高一貫校になる前までは、東大はもちろん、一橋大や東工大といった難関国公立の合格者も過去10年以上出ていませんでした」）、「私立や受験塾から」寄せられた「公立が私立中高一貫校の真似をしたとしても、果たしてどれほどの成果が挙がるのか、という冷ややかな視線」や「懐疑的な雰囲気」を一気に吹き払い、「白鷗ショック」、「白鷗サプライズ」と呼ばれる現象を引き起こしたことで知られる<sup>(30)</sup>。その「教育方針」は、次の通りである。

本校の教育理念「開拓精神」のもと、

- ・ 自らの意志と努力をもって自己を開発していく精神
- ・ いかなる苦難にも耐えて自己の人生を切り開いていく力
- ・ 社会の進展に寄与する旺盛な意欲

を持つ、社会でリーダーとして活躍できる、チャレンジ精神溢れる生徒の育成を目指しています<sup>(31)</sup>。

そして白鷗高等学校・附属中学校は、2016年2月に東京都教育委員会から、目標「生徒一人一人の能力を最大限に伸ばす学校づくりの推進」のための具体的な目標「国際色豊かな学校の拡充」、取組の方向（施策）「国際色豊かな教育環境の整備」の対象校に、公立中高一貫校としては唯一、新たに指定されている（新実施計

画における取組「中高一貫教育校の充実」、2016～2018（平成30）年度）。

白鷗高校・附属中学校において、日本人としてのアイデンティティの育成や国際交流、英語教育などに重点を置いた特色ある教育の更なる充実を図ります。また、帰国生徒や外国人生徒の受入れなどを行い、国際色豊かな学習環境を実現します<sup>(32)</sup>。

これを受けて（『都立高校改革推進計画・新実施計画』の平成30年度実施に向けて）、「平成28年度東京都立白鷗高等学校及び附属中学校経営計画」では、「目指す学校」の姿として、「世界へ羽ばたくリーダーたちの学び舎」、「伝統からグローバルな未来へ」というスローガンの下、「（1）6年間の系統的な教育、自己実現を図る学校」、「（4）地域に根ざし、開かれた学校」（いずれも原文から太字部分のみ抜粋）とともに、次の二点が設定されている（太字部分には、筆者が下線を付した）。

- （2） 創造性豊かで開拓精神に富んだ人格の涵養を目指し、未来社会のリーダーとなる人材を育成する学校。
- （3） 多様性を尊重し、日本の伝統・文化や異文化への理解を深め、国際社会に貢献する有為な人材を育成する学校<sup>(33)</sup>。

すなわち白鷗高等学校・附属中学校もまた、II章で見た東京都内の他の公立中高一貫校と同様に、将来の我が国社会を力強く牽引し、困難や障害を克服し、その発展に寄与するフロンティアリーダー、日本の伝統や文化を踏まえつつ、未来へ、そして世界へ羽ばたくクリエイティブなパイオニア、国際競争が進み、国際協力が求められる時代をバランスよく、たくましく生き抜き、地球規模で行動・活躍するグローバルな日本人の育成をめざしている。

こうした目標・理念は、2016年度白鷗中学校入試の適性検査（ただし2016年2月3日実施の一般枠のみで課されたものであり、そこでの選抜は、報告書（小学5・6年時の「各教科の学習の記録」を記載して、小学校長から提出された調査書。なお「外国語活動の記録」、「総合的な学習の時間の記録」、「特別活動の記録」、そ

の他の欄については点数化しない）と適性検査Ⅰ・Ⅱ、それぞれ300点、300点・400点で総合成績1000点満点（これらの点数は、それぞれの得点－5年：160点＋6年：160点＝320点、100点・100点で合計520点満点－を換算した後の値）によって行われている。ともに同1日実施の特別枠Aは、国語、算数、英語の分野で、報告書と面接によって、同Bは、囲碁・将棋、邦楽、邦舞・演劇の分野で、報告書、面接、実技検査によって、選抜が行われている）の問題の有り様に、忠実に反映されている。次の文書からは、そのことを明瞭に看取することができる<sup>(34)</sup>。

平成28年度東京都立白鷗高等学校附属中学校の適性検査問題の出題の基本方針等

1 出題の基本方針

- (1) 小学校等で学習した内容を基にして、思考・判断・表現する力をみる。
- (2) 与えられた課題を解決するための、分析・考察する力をみる。
- (3) 身近な事象の中から課題を発見し、それを解決するための方法を考えることを通して、思考・判断する力や自分の意見を適切に表現する力をみる。

2 適性検査問題の出題の方針、問題の構成及び主なねらい  
出題の基本方針を踏まえ、以下のとおり適性検査Ⅰ及び適性検査Ⅱを実施する。

適性検査Ⅰ（45分）

(1) 出題の方針

課題を発見し、それを解決する方法について自分の考えや意見を正しく表現し、的確に文章にまとめる力を見る。

(2) 問題の構成及び主なねらい

- ・ 大問を1問とし、小問3問で構成する。
- ・ 与えられた文章を正確に読み取り、問われていることについて、決められた字数でまとめる力を見る。
- ・ 与えられた文章を踏まえ、自分自身の体験に基づき、自分の考えや主張を400字以上450字以内で書く力を見る。

適性検査Ⅱ（45分）

(1) 出題の方針

資料から情報を読み取り、課題に対して思考・判断する力、論理的に考察・処理する力、的確に表現する力などをみる。

(2) 問題の構成及び主なねらい

- ・ 大問を3問とし、小問9問で構成する。
- ・ 渋滞を題材とし、決まりを理解し運用する力、速さについての理解、言葉・数・式を用いて考えて説明する力、数理的な処理の力を見る。
- ・ 世界遺産を題材とし、複数の資料（図表や地図など）から読み取った情報を関連付けて、時系列、空間の広がりの方から考察し、表現する力を見る。
- ・ チョウを題材とし、資料を読み解き推察する力、実験結果を分析し考察する力、それらを的確に表現する力、課題を総合的に解決する思考力、判断力を見る。

また書店に居並ぶ、お馴染みの「声教の中学過去問シリーズ」（各冊の裏表紙にて、「最も選ばれている過去問題集」と自称しているが、その看板に偽りはないはずである）の白鷗中学校版では、2016年度同校入試の適性検査で出された問題の「ポイント」が、次のように整理されている（ただし趣旨を損なわない範囲で、字句・表現とレイアウトの一部を変更した）。

#### 適性検査Ⅰ（各校独自問題）

出典は、原研哉『デザインのデザイン』（約650字）、後藤武・佐々木正人・深澤直人『デザインの生態学』（約1900字）による。

2種類の説明文を読んだ上で、読解題2問に答え、さらに作文するというスタイルである。

分量について見ると、全体の記述量は600～700字程度となっている。

次に内容を見ると、読解題では、筆者の考え方を100字程度でまとめるものが出されている。作文では、必ず入れなければならない内容などが細かく指定されているので、注意深く取り組む必要がある。

#### 適性検査Ⅱ（共同作成問題）

- ① 条件の整理、速さ、グラフ
- ② 室町時代の戦乱、京都の地図、自然環境の変化
- ③ アゲハの成長の観察についての問題

大問数は3題、小問数は9問である。

大問1は、交通渋滞を題材とした文章を読み、交通渋滞が発生する理由を考え、それを踏まえての応用問題に答えるという構成になっている。大問2は、カラフトマスの数の変化を表す表や、京都の現在と過去の地図などの資料を見て答える問題、大問3は、アゲハの体のつくりや成長の様子について考察するものである<sup>(35)</sup>。

このように白鷗中学校の適性検査では、暗記や単純処理だけで対応することができる穴埋め、選択、正誤、組み合わせ、並び替えの問題（ジグソーパズル型）ではなく、また（超）難問、奇問、

珍問と揶揄されるようなものでもなく、小学校で身につけた知識・技能と思考力、判断力、表現力を駆使して問題解決を図る教科横断的な総合問題、想像力を存分にはたらかせて、説明文、会話文、統計資料、実験データを読み解き、主体的・積極的に考え、自分なりに正しく判断し、文章や数式で論理的・説得的に表現する論述式（記述式）問題（ブロックパズル型）が出されている。これらはまた、答えが一つとは限らない、それどころか一人ひとり違って当然であるかのような問題であり（そうは言っても、学校側は、正答としての許容範囲と採点基準を予め設定しているし、また一部を除いて、あくまでも「解答例」<sup>(36)</sup>をウェブサイトに掲載している）、これからの社会・世界が求める創造力を問う問題であるとみなし得る。

#### IV 研究のまとめと今後の課題

本研究では、公立中高一貫校の入学者選抜段階で実施される適性検査が、志願者に対して求めている学力の内実を把握することを課題として、適性検査の基本的な性格を確認した上で、白鷗中学校のケースに着目して、適性検査における出題の実態を事例的に解明してきた。その結果、次の二つの知見を導出することができた。

- (1) 公立中高一貫校の適性検査では、特定教科の枠を越えた横断的・総合的・現代的なテーマを扱った応用問題が出され、国際的水準のコミュニケーション能力（国際機関において策定された学力標準）が問われている。このことは、公立中高一貫校が、グローバルリーダーの育成を教育方針の基軸に据えていることに合致している。
- (2) 白鷗高等学校・附属中学校は、日本人としての自己同一性と自国への帰属意識を備えたグローバル人材の育成を志向しており、そのため白鷗中学校入試の適性検査では、やがて国際社会で通用する人間となるために必要な資質・能力として、学力の諸側面のうち、とりわけ思考・判断する力と表現する力を測ることを意図した問題が出

されている。

そしてこれらの二項目が、総体として本研究の結論を構成している、ということが出来る。

最後に、公立小中一貫校が関係各方面に投げかけている諸問題のうち、今後において、できる限り早急な検討、再考、対応を要すると思われる事項を列挙して、本研究を閉じることにしたい。ただし紙幅の制約を考慮して、次の三つだけに限定する。

第一に、適性検査の問題の適切さ（教育課程適合性）について。

適性検査の作問経験者は、その「難しさ」を自著で次のように語っている。「この検査は私立のような各教科の問題を出題することはできない。また、小学校の学習指導要領から逸脱した出題であってもならない」<sup>(37)</sup>。これとは別に、フリージャーナリストによる次のような指摘も見受けられる<sup>(38)</sup>。

適性検査においては、事前に教育委員会によって、その内容が小学校の学習指導要領の範囲内に収まっているかどうかをチェックされ、指導要領から外れていれば、問題の作り直しが求められることもある。原則として、小学校の授業を受けていれば受験できるような問題作りを目指している。

そして適性検査の問題は、小学校学習指導要領の「総則」にある言葉を借りれば、「基礎的・基本的な知識及び技能」をどの程度身につけているか、それを答案用紙上でどれほど忠実に再現することができるかよりも（もちろんそれを土台に据えて）、むしろ「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」をどのくらい育てているか<sup>(39)</sup>、すなわち学力の量よりも質、低次の単純な学力よりも高次の複雑な学力、学業達成、アチーブメント、保有能力よりも習得可能性、パフォーマンス、発揮能力としての学力を念頭に置いて作られている。

しかし塾関係者（「難関校受験専門の進学塾」、「本格的進学塾」を自ら謳い、『千葉中対策模試』を実施した誉田進学塾（千葉市）の清水貫代表）が、『『小学校で習う内容とは似ても似つかない』と言い切る』ほどであることから明らかなように<sup>(40)</sup>、実際の出

題レベルは、教育課程の基準である学習指導要領、それに完全準拠した教科書（教科用図書、「主たる教材」と副（補助）教材、普通の公立小学校において日常的に行われている授業の水準をはるかに越えており、かなり難易度が高いと言わざると得ない。加えて適性検査では、制限時間内に解答を終えることが容易でないどころか、むしろ全部できなくて当たり前と思えるほど、大量の論述問題、文章問題が出されることが常となっている（「問題を見わたしたとき、例年その量の多さにびっくりする……」<sup>(41)</sup>）。「これを小学校卒業段階で、どこまで問えるのか」。現物を目にした大人の誰しものが、疑念を込めて、こうしたつぶやきを禁じ得ないはずである。

第二に、公立中高一貫校に入るための塾通いとその弊害について。

公立中高一貫校が推奨された背景には、「中等教育をゆとりのあるものに」という教育的理由と「私立に勝る大学進学実績を」という対抗的理由が、建て前と本音の二大理由としてあった（もう一つ付け足すならば、地域社会活性化等の柱にしようという地域的理由が挙げられる）。この表現が適切でないならば、公言される理由と隠れた目的と言い換えてもよい。そして、そのいずれもが、もっともらしく思われるかもしれない。しかしメリットには、本当に達成される見込みも保証もなかったのに対し、重大なデメリット（論点を際立たせるために、あえて対立的な言い方をしておく）、すなわち中学校入学段階での選抜が必要となり、その結果、進路選択の問題と受験準備教育が小学校段階に降りてくる可能性が現実のものとなることは、当初の段階から確実視されていたし、いまではすっかり、まさにその通り、となっている（これを危険視するかどうかは、最終的には価値観の問題である。論理的にどちらが、また何が正しいと言える性質のものではないし、たとえ積極的には支持し難いにしても、無下に否定することはできない）。

風説によれば、私立中学をめざすならば、新年度が開始する小学3年生の2月に入塾して（新4年生扱い）、合格に向けた受験

準備をスタートするのがよいらしい<sup>(42)</sup>。それに対して公立中高一貫校をめざすのであれば、5年生からで十分、6年生からでも間に合うと言われている（大仰にも「塾不要」を謳い、「公立中高一貫校を目指すなら、親が自宅で勉強をみてやるのが一番いい」とまで言い切る父親による息子2人の合格体験記も確かに出版されているが<sup>(43)</sup>、そこで公開されているエピソードは、かなり特殊な環境下での話であり、あまりにも一般性に乏しいため、有益な参照事例とはみなし難い）。ただ、いずれをめざすにせよ、「小学校の勉強だけで突破するのが容易でないことには変わりがない」。進学塾に通って「訓練」を積まなければ、どちらにも対応できないのだ（先に登場した清水曰く、「訓練が必要です」）。子どもの幸せを第一に考える親であれば皆、「こんな早くから選別されてかわいそうに」、「挫折感は味わわせたくない……」と思うはず<sup>(44)</sup>。しかし、だからこそ逆に、「降りる」<sup>(45)</sup> ことを選択しなかった、或いは引っ込みがつかなくなって、そうすることができなかつた子どもとその家族に対しては、「落ちる」ことの回避に向けて、相当のプレッシャーが持ち込まれることになる<sup>(46)</sup>。

子どもも親も、連日夜遅くまでの塾通いと大部なテキスト（日能研の小4標準クラスに年度当初からお子さんを通わせている親御さんに伺ったところ、通常学期用だけでも、よく知られた国・算・社・理4教科分の『本科教室』各1冊ずつで計4冊、国・算と社・理がそれぞれ合冊となった『栄冠への道』計2冊に加えて、『計算と漢字』、『復習の社会』と地図シート、『復習の理科』と『実験資料集』といったサブテキストや「書き取りと振り返り」、「演習」、「復習」等のための各種「ノート」、何冊かの解答用紙冊子、その他と実に盛りだくさんで、ずっしりと重い、とのことだった）やプリントの山、送迎と宿題のマルつけからは、どうしたって逃げることはできないし<sup>(47)</sup>、毎回ある計算や漢字の小テスト、定期的に行われる単元ごとの復習テスト（日能研ならば、2週間に一度の学習力育成カリテ）と全国規模の実力テスト（同じく1～2か月に一度の全国公開模試／実力判定テスト）の点数・順位、それに基づく頻繁なクラス替え、或いは同一クラス内での席替え

の結果には、その都度一喜一憂させられる。学校からの帰り道にランドセルのまま道草を食らう緩やかさなど、もはや望むべくもないし、平日の放課後はもちろん、せつかくの週末や休日にでさえ、友達と遊ぶ時間的な余裕は、なかなか確保することができない。学校が長期休業に入ったとしても、塾の期間講習や特訓の予定がびっしりと詰まっていて、海にも山にも田舎にも、近場の公園にだって、なかなか行けやしない。子どもの健全な成長・発達を願うとき、果たしてこれでよいのかどうか（あえて付言するならば、中学受験＝悪というような短絡的な図式には、筆者は一切与さない。打ち込むものが、スポーツならば「素晴らしい」、勉強ならば「かわいそう」というのは、どう考えてもおかしい。中学受験を指して、「子どもの一生を決める」<sup>(48)</sup>とまで言い切ってしまうような、あまりにも大袈裟なキャッチフレーズには賛同しかねるにしても、青地にグレー文字のNバッグを背負う子ども達の姿を混雑した電車や駅構内で見かけると、その健気な頑張りを勝手に想像して、一種の感動さえ覚えるし、心から連帯のエールを送りたくなる。とはいえ、中学受験が大衆化し、競争が激化する現状について、「いまは、そういう時代だから仕方がない」<sup>(49)</sup>の一言で済ませて、あっさりと追認してしまうことは、事態の悪化に荷担することと同義であり、大人の振る舞いとしては、あまりに無責任であろう）。

いまさらルソー（Jean-Jacques Rousseau）の消極教育のテーゼ、「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手につくとすべてが悪くなる」<sup>(50)</sup>という『エミール』の冒頭にある例の一文を引き合いに出すまでもなく、子どもの教育は、「正しき」方向性として、予め人間に内在させられているはずの「自然」を無視しては、決してうまくいかないのではなかったか。また自然が示してくれるみちすじに従うことによってこそ、子どもには、やがてやって来るはずの過酷な試練に耐え、自分の人生を幸福に生きる力が身につくのではなかったか。吉野源三郎の人生読本『君たちはどう生きるか』（新潮社が企画し、山本有三が編纂した「日本少国民文庫」全16巻の最後の配本と

して、1937（昭和12）年に初出）に登場するコペル君が、15歳の中学2年生にしてそうであるように、「成績の方」は「たいてい一番か二番、三番と落ちたことはめったにありません」というほど「非常に優秀」であっても、「点取虫の勉強家というわけではなく、どうして、遊ぶことは人一倍好きな方」、しかも「受持の先生」が「こまる」くらいに「いたずら好き」で「いたって無邪気」というのが<sup>(51)</sup>、今昔変わらぬ子ども子どもたる所以ではなからうか。（少なくとも、ある年齢以上の）親が、本来的な意味での「子どもらしさ」<sup>(52)</sup>を憧憬し、もう一昔も二昔も前どころか、それ以上に遠い昔の話となった昭和の記憶を呼び覚ましながらか、腕白小僧／お転婆娘だった自らの少年／少女時代をノスタルジックに振り返るとき<sup>(53)</sup>、これらの問いが頭をもたげるとは、どうにも不可避であろう。

第三に、学校選択の自由を推奨することへの疑問について。

仮に公立中高一貫校の増設が、首都圏はもちろん、あちらこちらで今後相次ぎ、適性検査が現行のあり方を維持したまま、より広範囲で行われるようになるならば、一部の限られた子ども達にとって有利な状況が、ますます強まり、教育機会の階層化が進行していくものと予想される。超難関の私立中学が第一志望でありながら、公立中高一貫校を併願で受けるケース（このとき公立の方は、第二志望、或いはそれ以下であるか、場合によっては滑り止めとみなされている）は、大都市部を中心に、普通に見られる現象であるが、そのような受験行動をとる子ども達は、文化的、社会的、経済的に上位層の家庭に育っていて、もともと高学力であり、また両方に対応可能であると想定されるからである。

そして公立中高一貫校が、私立の場合と同様に、大学進学実績（最もわかりやすい数的尺度が、『週刊朝日』や『サンデー毎日』に掲載される大学合格者高校ランキング、特に2016年度入試のベスト10であれば、170（103）人（カッコ内は現役合格者数で、内数として計上されている。表示形式は、以下同じ）の開成、102（82）人の国立の筑駒、94（それぞれ72、56）人で並ぶ灘と麻布が上位三傑に位置し、以下74（54）人の洪幕、71（57）

人の聖光学院、59（52）人の桜蔭、そして同じ57（それぞれ41、37、26）人で栄光学園、駒場東邦、国立の学附が続く東大合格者のそれであることには、誰にも異存はないはずである<sup>(54)</sup>。なお上記の人数については、ソースによって若干の相違があり、やや不確定な部分を残している）で世間から評価され、その方向で拡大していく傾向が強まるならば、我が国の中等教育は、制度的には単線型でありながら、機能としては分岐型のようにになっている、と言わざるを得なくなるであろう。これが、教育の機会均等を大原則として、6・3・3制の理念と形式を堅持してきた我が国において<sup>(55)</sup>、果たしてどこまで受け入れられるものなのか。少なくとも教育制度設計には門外漢の筆者の力では、まるで予測不能である。ただし危惧されるような状況が、社会生活の諸側面での規制緩和や自由化・市場化を基本的な善とみなし、これを推進する勢力・意見の強まりを背景として、学校教育を含めて、至る所で着々と、確実に進行中であることは、どうにも疑いようがない。今後の学制改革の成り行きを注視しつつ、そうしたマクロレベルでの動きが帰着するところの、学校の組織運営（教育課程経営、カリキュラムマネジメント）や教授－学習過程（授業、学力）の問題について、あるときはメゾレベルで、またあるときはマイクロレベルで考究していきたい。

注

- (1) 「都立高校改革計画 新たな実施計画－日本の未来を担う人間の育成に向けて－」 東京都教育委員会 2002（平成14）年10月
- (2) 文部科学省施策パンフレット『個性を伸ばす6年 中高一貫教育の推進』に掲載された情報を、次の論文から重引。ただし図は省略した。  
田中洋 「公立中高一貫校の現状」 『琉球大学教育学部紀要』第68集 琉球大学教育学部 2006（平成18）年3月 p.274.
- (3) 併設型では、自校の中学部から無試験で、そのままスト

レートに上がってくる内部進学者（内進生）に加えて、外部（他中）出身者を、高校の段階から新規に受け入れている。このときは、当然のことながら、試験が行われるし、両者の人数比率（定員の配分）は、学校ごとにまるっきり異なる。

- (4) 横田増生 『中学受験』 岩波書店 2013（平成25）年 p.154.（「連携型の場合、中学と高校の六年間で一貫した教育を行う形になっていないため、通常では、中等教育学校と併設型の二つを公立中高一貫校とみなす場合が多い。よって、本書でも連携型を外して議論を進めていく。」）
- (5) 「入学試験、例えば大学入試の場合には、高等学校で学習した結果獲得した学力を測定するという学力検査の側面と大学の入学後、一定水準の学業成績を収められるか否かを予測する適性検査の側面とが要求される」と言われる。とはいえ、もともと両者には、かなりの重複が見られ、容易には峻別し難い。

野口裕之 「学力検査」 編者代表細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清 『新教育学大事典』第1巻 第一法規 1990（平成2）年 p.437.

- (6) 増田ユリヤ 『新しい「教育格差」』 講談社 2009（平成21）年 p.19.
- (7) 2016（平成28）年1月30日付朝日新聞に掲載された記事「私立中入試 多彩」では、次のように述べられている。

中学入試の模試を実施する首都圏模試センター（東京都千代田区）によると、従来の学力試験とは異なるタイプの入試は昨年頃から目立ち始めた。今年、入試で英語を設けるのは、東京、埼玉、千葉、神奈川の1都3県で64校に上り、昨年の2倍に。公立中高一貫校の入試に似た教科横断型の「適性検査型」の試験を導入する学校も、昨年より約30校多い86校になる。

なお次の雑誌記事を併せて参照願いたい。

「私立に広がる『適性検査』／公立中高一貫校と併願可能

で低倍率」 『AERA』 No.32. (第28巻32号、通巻1518号) 朝日新聞出版 2015 (平成27) 年7月27日 pp.17-20.

(8) 若林敏 『中学受験 公立中高一貫校のすべてー全国96校の傾向と対策』 ダイヤモンド社 2009 (平成21) 年

(9) 井島秀樹 「公立中高一貫教育校の現状と課題ー中等教育学校及び併設型中高一貫教育校へのアンケート調査を通してー」 『教育行財政論叢』 第9号 京都大学大学院教育学研究科比較教育政策学講座内教育行政学研究室 2005 (平成17) 年3月 pp.97-111.

坂野慎二 「中高一貫教育の全国的動向」 『教育制度学研究』 第10号 日本教育制度学会 2003 (平成15) 年11月 pp.276-284.

坂野慎二 「学校体系における中等教育段階の意義と機能」 『教育学研究』 第77巻第2号 日本教育学会 2010 (平成22) 年6月 pp.171-182.

田中前掲論文 pp.273-284.

濱本真一 「公立中高一貫校拡大の規定要因分析ー学校タイプによる傾向の違いに着目してー」 『社会学年報』 第41号 東北社会学会 2012 (平成24) 年7月 pp.115-125.

これらとは視角の異なる卓越した先行研究として、藤田英典の原理的かつ文脈的な論文と、そこで俎上に載せられている黒崎勲の浩瀚の書の二つを挙げることができる（ともに下掲）。前者は、公立中高一貫校の導入に明らかに反対の立場をとりながらも、「公立中高一貫校のメリットとデメリット」（p.59.）やその「是非」（p.62.）について、かなり丁寧に論じている。後者は、アメリカにおける学校改革の事例として、ニューヨーク市イーストハーレム地区とシカゴ市の場合を取り上げて、「学校選択の理念を教育改革（学校改革）の一つの中心的な理論問題として検討」（p.1.）し、さらに随所で我が国の現状（当時）への

インプリケーションに言及している。しかしいずれの場合も、さすがに適性検査までは、その射程に収め切れていない。したがって本研究との間では、何より直接の対象の点で、かなりのズレがあると言わざるを得ない。

藤田英典 「教育の市場性／非市場性 『公立中高一貫校』『学校選択の自由』問題を中心に」 森田尚人・藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編 『教育学年報5 教育と市場』 世織書房 1996（平成8）年 pp.55-95.

黒崎勲 『学校選択と学校参加—アメリカ教育改革の実験に学ぶ』 東京大学出版会 1994（平成6）年

- (10) ena監修 『イチからわかる！公立中高一貫校適性検査対策問題集』 学研 2013（平成25）年 pp.2-3.
- (11) 大原予備校・朝日学生新聞社編集部共編 『公立中高一貫校 わかる！適性検査45題詳細解説』 朝日学生新聞社 2010（平成22）年  
大原予備校・朝日学生新聞社編集部共編 『基礎からスタート！公立中高一貫校適性検査対策問題集』 朝日学生新聞社 2012（平成24）年
- (12) 腰越滋 「公立中高一貫校の入学者選抜に関する一考察—適性検査に注目して—」 『日本教育学会第68回大会発表要旨集録』 日本教育学会 2009（平成21）年8月 p.349.

なお次の報告（「Report」）を併せて参照願いたい。

中垣真紀 「未来学力の規定と育成について—公立中高一貫教育校の適性検査問題からの一考察—」 『BERD』第3号 ベネッセ教育研究開発センター 2006（平成18）年1月 pp.41-47.

- (13) 小林公夫 『論理思考の鍛え方』 講談社 2004（平成16）年 pp.22-57.
- (14) 小林公夫 『公立中高一貫校』 筑摩書房 2013（平成25）年 pp.82-144.
- (15) 若林敏 『新版・公立中高一貫校 合格への最短ルール

- 一適性検査で問われる「これからの学力」一』 WAVE出版 2013（平成25）年
- (16) 早稲田進学会 『朝日小学生新聞の公立中高一貫校適性検査対策シリーズ4冊セット』 朝日学生新聞社 2015（平成27）年  
 早稲田進学会 『作文力で合格！公立中高一貫校適性検査問題集』 朝日学生新聞社 2014（平成26）年  
 早稲田進学会 『分析力で合格！公立中高一貫校適性検査問題集／社会的分野』 朝日学生新聞社 2015（平成27）年  
 早稲田進学会 『思考力で合格！公立中高一貫校適性検査問題集／算数的分野』 朝日学生新聞社 2015（平成27）年  
 早稲田進学会 『考察力で合格！公立中高一貫校適性検査問題集／理科的分野』 朝日学生新聞社 2015（平成27）年
- (17) 河合敦 『都立中高一貫校10校の真実 白鷗／両国／小石川／桜修館／武蔵／立川国際／富士／大泉／南多摩／三鷹／区立九段』 幻冬舎 2013（平成25）年 pp.118-139.
- (18) 金子勝 『反グローバリズム 市場改革の戦略的思考』 岩波書店 1999（平成11）年  
 金子勝 『市場』 岩波書店 1999（平成11）年  
 苅谷剛彦 「『中流崩壊』に手を貸す教育改革 個性教育が広げる『機会の不平等』」 『中央公論』第105巻第8号 中央公論社 2000（平成12）年7月 pp.148-163.
- (19) 「小学校お受験 都が参戦／小中高一貫校 6年後開校へ」 2016（平成28）年2月1日付朝日新聞
- (20) 「都立小中高一貫教育校基本構想検討委員会 中間まとめ」 都立小中高一貫教育校基本構想検討委員会 2013（平成25）年8月 pp.4-6.
- (21) 「都立小中高一貫教育校の設置に関する検討結果」 都

立小中高一貫教育校基本構想検討委員会 2015（平成27）年11月 pp.15-16.

- (22) <http://www.m-urawa.ed.jp/index.cfm/1,0,44.html>  
2016（平成28）年9月14日に接続確認済み。
- (23) <http://www.city-saitama.ed.jp/ohmiyanishi-h/>  
2016（平成28）年3月28日に接続確認済み。ただし同日以後、特に年度が替わってから修正や変更等が生じていたとしても、そこまではフォローし切れていない可能性がある。この点は、注（27）で列挙したHPのうち、4校分（千葉、稲毛、相模原、平塚）についても同様である。
- (24) 「さいたま市立中等教育学校（仮称）に係る基本計画」  
さいたま市教育委員会 2015（平成27）年2月 p.2.
- (25) [http://www.inagakuen.spec.ed.jp/comm2/htdocs/?page\\_id=163](http://www.inagakuen.spec.ed.jp/comm2/htdocs/?page_id=163)  
2016（平成28）年9月15日に接続確認済み。
- (26) [http://www.inagakuen.spec.ed.jp/jhs/comm2/htdocs/?page\\_id=54](http://www.inagakuen.spec.ed.jp/jhs/comm2/htdocs/?page_id=54)  
2016（平成28）年9月15日に接続確認済み。
- (27) <http://www.chiba-c.ed.jp/chiba-h/chibachu/index.html>  
<http://www.inage-h.ed.jp/infjuniorhigh/index.html>  
<http://cms1.chiba-c.ed.jp/tohkatsu-jh/>  
<http://cms1.chiba-c.ed.jp/tohkatsu-jh/学校案内/schooloutline/>  
[http://www.sagamihara-chuto-ss.pen-kanagawa.ed.jp/1\\_school/main12.html](http://www.sagamihara-chuto-ss.pen-kanagawa.ed.jp/1_school/main12.html)  
[http://www.hiratsuka-chuto-ss.pen-kanagawa.ed.jp/2\\_rinen/index.html](http://www.hiratsuka-chuto-ss.pen-kanagawa.ed.jp/2_rinen/index.html)  
<http://www.kaw-s.ed.jp/jh-school/index.cfm/1,505,19,html>  
<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/hs/minami/jhs/kyouikuhoushin.html>  
2016（平成28）年3月28日（上記4校）と同年9月14日（東葛、川崎、横浜）に接続確認済み。

- (28) 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編 『習得・活用・探究の授業をつくる PISA型「読解力」を核としたカリキュラム・マネジメント』 三省堂 2008(平成20)年
- (29) 助川晃洋 「キー・コンピテンシーと“well-being”－DeSeCoプロジェクトにおける両者の関係のとらえ方とそれを支える福祉理論について－」 『宮崎大学教育文化学部紀要(教育科学)』第23号 宮崎大学教育文化学部 2010(平成22)年9月 pp.25-37.  
 助川晃洋 「活用型学力を育成する小中一貫教育実践－異校種間のカリキュラムをつなげる－」 河原国男・中山迅・助川晃洋編著 『小中一貫・連携教育の実践的研究－これからの義務教育の創造を求めて－』 東洋館出版社 2014(平成26)年 pp.49-61.
- (30) (4)と同じ pp.148-149.
- (31) [http://hakuo.ed.jp/web/?page\\_id=28](http://hakuo.ed.jp/web/?page_id=28)  
 2016(平成28)年9月7日に接続確認済み。
- (32) 「都立高校改革推進計画・新実施計画」 東京都教育委員会 2016(平成28)年2月 p.54.
- (33) <http://hakuo.ed.jp/web/pdf/Management/28ManagementPlan.pdf>  
 2016(平成28)年9月8日に接続確認済み。
- (34) <http://hakuo.ed.jp/web/pdf/EntranceExam-J/28BasicPolicy.pdf>  
 2016(平成28)年9月7日に接続確認済み。
- (35) 「出題の傾向(28年度) 白鷗のココがポイント!!」 『平成29年度用 都立白鷗高校附属中学校 10年間スーパー過去問』 声の教育社 2016(平成28)8月所収(ページ番号なし)
- (36) <http://hakuo.ed.jp/web/pdf/EntranceExam-J/28ExampleAnswer.pdf>  
 2016(平成28)年9月12日に接続確認済み。

- (37) (17) と同じ p.151.
- (38) (4) と同じ p.156.
- (39) 文部科学省 『小学校学習指導要領』 東京書籍 2008  
(平成20)年7月 p.13.
- (40) 「公立中高一貫の波紋」 2008 (平成20)年11月2日付  
朝日新聞
- (41) 「出題の傾向 市立浦和のココがポイント!!」 『平成29年度用 さいたま市立浦和中学校 7年間スーパー過去問』 声の教育社 2016 (平成28)年8月所収  
(ページ番号なし)
- (42) 高濱正伸 『中学受験に失敗しない』 PHP研究所  
2013 (平成25)年 p.57.
- (43) 鈴木亮 『塾不要 親子で挑んだ公立中高一貫校受験』  
ディスカヴァー・トゥエンティワン 2007 (平成19)年  
p.4.
- (44) (40) と同じ
- (45) 荻谷剛彦 『階層化日本と教育危機 不平等再生産から  
意欲格差社会／インセンティブ・ディバイドへ』 有信堂  
2001 (平成13)年  
中島義道 『人生を<半分>降りる 哲学的生き方のすすめ』 筑摩書房 2008 (平成20)年
- (46) (40) と同じ
- (47) 本田由紀 『「家庭教育」の隘路－子育てに脅迫される  
母親たち』 勁草書房 2008 (平成20)年  
多賀太 「『教育する父』の意識と行動－中学受験生の父親の事例分析から－」 『教育科学セミナー』第43号  
関西大学教育学会 2012 (平成24)年3月 pp.1-18.
- (48) 和田秀樹 『子どもの一生を決める 失敗しない中学受験  
入門』 KADOKAWA／中経出版 2014 (平成26)年
- (49) 原武史 『滝山コミュニケーション一九七四』 講談社 2010  
(平成22)年  
本書は、「いま」を遡ること40数年、まだ「そういう

時代」ではなかった頃の都下郊外における中学受験とその周辺の事情について、当事者（主人公の「私」、原少年）の立場から余すところなく活写したノンフィクション作品である。ただし、そもそも同書は、1970年代の小学校文化とチャイルド・ソーシャリズム体験（班競争と連帯責任、反省会での自己批判、代表児童委員会の選挙演説、林間学校での合唱やキャンドルファイアー……）を分析した秀逸な思想的著作とみなされるべきであり、その本来的な意義は、革新的・集団主義的＝「民主的」理想を掲げる教育がはらむ暴力性、「子どものために」なされる善意に満ちた教育が、その底の浅さ故に別様の権威主義を呼び込むという逆説、学校による子どもの思考と身体の管理と秩序化、その結果として子どもが学校に対して抱く違和感や息苦しさ、その中で「異質」なものが排除される痛みを見事に描き出している点にこそ認められる。

また小説ではあるものの、原前掲書と同様に自伝的な次の二つの作品では、それぞれ麻布、桐朋という私立中高一貫校での生活の様子が、生き生きと、濃密に語られており、私学ならではの校風や文化を知る上で、とても興味深い。ただし公立中高一貫校が舞台となったものを、筆者は寡聞にして知らない。

北杜夫 『楡家の人々（上・下）』 新潮社 1994（平成6）・1995（平成7）年

嵐山光三郎 『夕焼け学校』 集英社 1994（平成6）年

- (50) ルソー著 今野一雄訳 『エミール（上）』 岩波書店 1962（昭和37）年 p.27.
- (51) 吉野源三郎 『君たちはどう生きるか』 岩波書店 1982（昭和57）年 pp.5-7.
- (52) 本田和子 「消滅か拡散かー子どもらしさのゆくえ」 『思想の科学』第7次第71号 思想の科学社 1986（昭和61）年1月 pp.2-9.

- (53) 社団法人日本写真家協会 『日本の子ども60年』 新潮社 2005（平成17）年  
東京都写真美術館編 『昭和の風景』 新潮社 2007（平成19）年  
土門拳 『腕白小僧がいた』 小学館 2002（平成14）年  
林望 『ついこの間あった昔』 弘文堂 2007（平成19）年  
これらと同種の出版物は数多あり、まさしく枚挙に遑がない。
- (54) <http://www.inter-edu.com/univ/2016/jisseki/todai/ranking/>  
2016（平成28）年4月7日に接続確認済み。そこで公開されている数字は、あくまでも「取材申込にご協力いただいた学校」からの情報提供に基づいて、同年3月24日にアップロードされたものである。東大合格者を輩出したすべての高校を網羅しているわけではないことは、いくつかの上位常連校、例えば埼玉県立浦和高等学校が抜け落ちていることから明らかであるが、それらを追加したとしても、大幅な順位の変動はあり得ないはずである。
- (55) 助川晃洋 「6・3・3制の理念とその成立経緯－為政者の戦後教育史認識を乗り越えるために－」 『教育学論叢』第33号 国士舘大学教育学会 2016（平成28）年2月 pp.143-154.

## 参考文献

- おおたとしまさ 『中学受験という選択』 日本経済新聞出版社 2012（平成24）年
- 片岡栄美 「教育達成過程における家族の教育戦略－文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に－」 『教育学研究』第68巻第3号 日本教育学会 2001（平成13）年9月 pp.259-273.
- 片岡栄美 「格差社会と小・中学受験－受験を通じた社会的閉鎖、

- リスク回避、異質な他者への寛容性― 『家族社会学研究』  
第21巻第1号 日本家族社会学会 2009（平成21）年4月  
pp.30-44.
- 加藤美帆 「国・私立中学校進学者の家庭の教育戦略と公立小学校への意識」 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊  
第13号－2 早稲田大学大学院教育学研究科 2006（平成  
18）年3月 pp.23-32.
- 加藤美帆 「中学校進学における学校の『選択』についての社会的考察―パネル調査の分析から―」 『人間文化論叢』第9  
巻 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 2007（平成  
19）年3月 pp.389-397.
- 小杉拓也 『公立中高一貫校に合格できる7つのルール（増補改訂版）』 エール出版社 2015（平成27）年
- 小針誠 「階層問題としての小学校受験志向―家族の経済的・人口的・文化的背景に着目して―」 『教育学研究』第71巻第  
4号 日本教育学会 2004（平成16）年12月 pp.422-  
434.
- 佐藤智 『公立中高一貫校選び 後悔しないための20のチェックポイント』 ディスカヴァー・トゥエンティワン 2015（平成27）年
- 橘木俊詔 『公立 vs 私立 データで読む「学力」、「お金」、「人間関係』』 KKベストセラーズ 2014（平成26）年
- 西本憲弘・佐古順彦編 『伊奈学園 新しい高校モデルの創造と評価』 第一法規 1993（平成5）年
- 日能研進学情報室 『中高一貫校』 筑摩書房 2008（平成20）年
- 野田英夫 『「中学受験」の経済学 わが子の学歴のつくり方』 眞人堂 2016（平成28）年
- 樋口義人 『中学受験の常識・非常識』 角川書店 2009（平成21）年
- 二上能基 『「子供のために」を疑う 10代の子供を伸ばす7つの知恵』 朝日新聞出版 2009（平成21）年

森上展安 『10歳の選択 中学受験の教育論』 ダイヤモンド社  
2009（平成21）年

柳沢幸雄 『なぜ、中高一貫校で子どもは伸びるのか』 祥伝社  
2015（平成27）年

以上に加えて、無料のチラシ、リーフレット、パンフレットから文庫、新書、ムック、ペーパーバック、ソフトカバー等、比較的安価で、大抵は薄く、簡易な装丁・製本によるものまで（函入りやハードカバー等、高価で、厚く、堅牢なつくりのものは、どこを探しても全く見当たらない）、中学受験をテーマにしている様々な印刷物や出版物、本文中で取り上げたものに加えて、教英出版の「実物に近いリアルな紙面のプリント形式過去問〇年分」や東京学参の「中学校別入試問題シリーズ」によって代表される適性検査の学校別過去問題集、学校ガイドブックや中学受験案内をはじめとして、関連する文献・資料を数多く収集し、適宜参照した。なお「注」と「参考文献」の両欄で挙げたものはもちろん、それ以外も含めて、本研究で使用した文献等の中には、およそ学術的とは言い難いものが、かなりの割合で含まれている。しかしそれらに頼らなければ、対象に迫ろうにも、必要最低限の情報を収集することすら到底かなわず、いわば門前払いを食うことになり、研究が企画倒れに終わるのは避けられなかった。その扱いは、及ばずながら慎重を期したつもりである。ぜひともご寛恕いただきたい。